注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ盗賊と槍兵の願い

【作者名】
泥の男

【あらすじ】
もし、Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏのランサーのマスターがケイネスではなく、別のオリ主のマスターだったら？
ケイネスを殺しに来た彼はふとした拍子にランサーのマスターとなる。
「まぁ、しかたないか」

盗賊者の戦いと契約

暗い、そこはとても暗い場所だった。電気とは違う魔術の灯りでここに何があって、どうなっているかはすぐにわかるが、それも数分前。今はその灯りも術者と共に消えかかっている。

この場所で儀式を行おうとしていた者はまさかこのような事態になるとは夢にも思っていなかったとはいえ、切り札を持っている自分に敗北などあり得ない。いや、なかったとしても、ある程度の賊に自分は負ける道理などない。負けるはずがない。目の前にいる敵は素人であると認識したからだ。

「あんた、こんな言葉知ってるいるか？」

だが、その考えはいとも簡単に砕かれた。

「油断大敵…まぁ、あんたの場合、大層な権威やらなんやらがあるから慢心するんだろうが」

「な、なぜ、なぜだ！……貴様は、いったい？」

そこには2人の男がいた。1人は天才魔術師と言われる魔術の名門アーチボルト家の嫡男

「死にかけのあんたに名乗る必要があるのかい？ケイネスさんよ？あと、自分の切り札をおいそれと答えるほど甘くはないぜ。ともかく、あんたが普通の魔術師の限りは俺には勝てないぜ。」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトという男の質問に答えようとはしない男はまだ若く20代前半といったとこだ。東洋人の顔と、英

国人ような瞳しており、ズボンやベルト、胸などには多数のポーチがつけられており、魔術師というより軍人に近い。

（なぜ、このようなことに）

数分前

ケイネスは近々東洋で行われる魔術師同士の殺し合いと言う名の戦争、聖杯戦争に参加するために、英霊召喚の儀式を行っていた。

そこに、扉が開く音がしたが振り向く前にケイネスは相手が自分の知る人物ではないと察知していた。

「何者だ？」

フードをかぶっており、顔が見えないが体格からして男であるとすぐにわかった。男は答えず、ケイネスを見つめる。

「まぁ、何者であってもこのような場所にずかずかと入ってきたのだ。賊に違いあるまい？」

問いただしたわけではない。が、

「あぁ」

とだけ答えるとフードの男は問答無用でナイフを投げつけた。

「！おろかな」

しかしそれは魔術の障壁に阻まれ、威力を失って地に落ちる。

「私の工房ではないにしろ、どうやってここまでたどり着いたかは知らんが、そのような物で私を討とうなど……片腹痛いわ!!」

瞬間、無数のガンドと風の刃が男を襲い、当たった場所に粉塵が舞った。

「たあいもな…!」

粉塵に近づくケイネスに何かが飛びかかる。小石のような大きさのそれは複数あった。すぐに障壁をはるがケイネスはここでミスをしてしまう。障壁の力が少々弱かったのだ。

(これは、魔力のこもった宝石!まずい)

そう考えたと同時にその宝石はその輝かしさを散らすがごとく爆散した。

「なるほど、すこしは、魔術に精通しているということか!」

瞬時に力を強めてガードしたもの服は汚れ所々かすり傷ができていた。これが何らかの高等秘術のようなものによってつけられたものなら彼は相手に賞賛を与えただろうが、それとは違い下賤な賊の悪あがきと言ってよい攻撃に付けられたのなら、プライドはズタズタに切り裂かれた。

「!どこへ、いった!!」

この地下室は推定３０メートルを超える広々とした空間で遮蔽物となる柱や魔術に使う道具や家具もいくつかおいてある。

「いいだろう!聞け、賊よ!これから行われるのは退治でも粛清でも

ない！単なる掃除だ！今から貴様にはここに来たことを後悔…」

言い終わる前に今度は弾丸が彼の頭をかすめる。

「ふ、ふふ、――――――殺す」

懐からケイネスは少し大きめの瓶を取り出し、その中身にあった水銀を地面に出しながら呪文をとなえるとこぼれた水銀は大きく膨脹して、やがて大きな塊となる。

「そこだな……Ｓｃａｌｐ!!」

とたん、水銀はまるで意志を持つかのごとく相手を的確にとらえ、その形を刃に変えて襲い掛かる。これこそがケイネスが誇る切り札、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）

「逃げても無駄だ！」

とても人間技とも思えない動きで回避してフードの男はその攻撃をよけ続ける。

（なるほど、魔術による肉体強化…だけではないな。おそらく奴は一時的に感覚の一部を遮断し、人間にあるリミッターを自分の意志で開放しているな）

火事場のくそ力。そうもいわれるこれは、普段の人間では到底起こりえない。が何らかのことがきっかけによって一時的に開放されると一般の人間もそれこそスポーツマンを超えるかもしれない動きもできる。

（だが、それもそんなには持つまいて）

次の一撃で決めるそう決めてケイネスの前にあろうことか男は出てきた。

「自らの死に悟り出てきたか？だが許しは…」

「うざい！」

またもケイネスの言葉を聞かず今度は２つの拳銃を乱射する。が、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）の自動防御で防がれる。

「そんなおもちゃごときで……」

「どうなると思う？」

その声が聞こえたと同時に、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）は爆散し、あたりに飛び散る。

「なっ！」

当然のことながらケイネスの防御は丸裸になる。そこに一発の弾が彼の肩にあたると拳銃とは思えない威力でケイネスの腕を吹き飛ばした。

「ぐあぁぁぁ!!!!!腕がぁぁ！令呪がぁぁ！」

「さっきからべらべらと」

いつの間にかフードは取れていた男は一瞬でケイネスの懐に入り拳を腹に入れ、即座に回し蹴りを加えるとサッカーボールのようにケイネスの体は転がって行った。

「うるさいんだよ」

何が起こったか理解はできなかっただろうが仕組みとしては簡単だった。

男が撃っていた弾丸は魔力を充分に溜め込んだ宝石でできており、最初に撃っていたのは拡散弾に近く放たれた瞬間に空中で宝石の弾丸は四散し、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）に防御される。

そしてそのかけらの一部は中に取り込まれる。巨大な城壁に正面から攻撃しても大したことはないが、もし壁の中に爆弾が埋め込まれていたら、そしてそれが爆発したら、壁は内部崩壊する。

取り込まれた宝石は小さくとも、数十発も乱射されたならかなりの数は取り込まれていただろう。

そして腕を吹き飛ばしたのも同じく魔力を溜め込んだ弾丸である。威力はマグナムを悠々と超えるほどである

魔宝石弾

様々な威力を使い分けて撃っているこの弾丸だが、散弾はレベル1腕を吹き飛ばしたものでさえ2である。

そして今につながる

「ごほっ、がはっ！」

必死にこの場から逃げようとするも、両足の骨も筋肉も粉砕され、腕に関しては片腕をもがれ、肋骨から肺は潰れており、体全体はボロボロで生きているのが奇跡の状態であった。治癒を行おうにも目の前にいる男はそんな時間を与えないのは火を見るより明らかである。

「すまないな。あんたが俺の依頼者にどういう恨みをかったのかは知らんし、知りたくもないが、契約は守るのが俺のやり方でね」

カチャリと、S&Wと言われる拳銃を改造したものを向ける。

「じゃあな。できれば俺を恨まないでくれ」

引金を引こうとしたまさにその時だった。部屋が一気に明るくなる。

「な、なんだ…痛っ！」

同時に腕に痛みが走った光は部屋の中央にあった魔法陣からのものであった。

「!!」

警戒を強めると同時に、ケイネスの監視もしていると

「ふ、ふふ、ふはははははは！」

突然ケイネスは笑い出す。

「これで貴様も終わりだな！どうやら私は運がいいようだ！」

「……」

パァンと通常の弾丸をあえて耳に発砲した。

「〜〜〜〜〜!!!」

片耳がなくなったショックと痛みでケイネスは声にならない叫びをあげる。
そうしていると光はだんだん小さくなり、そこに
「なんだ、おまえは？」
新たな人影があった。その人影がこちらに歩いてくる。が、不思議とこいつは敵ではないと、男は気づいていた。だからこそ、その顔が認識できる距離までの接近を許したのだ。
「サーバントランサー、召喚に応じ、参上いたしました」
そう言った2本の槍を持った男からは並外れた魔力が感じられた。隣にいるケイネスを先の自分よりも早く仕留めることのできそうなこの男は、何を思ったのか首を垂れたのだ。ケイネスではなく、その命を奪おうとする、自分に。
「な、何をしているんだ！お前のマスターはそいつではない!!」
とたん、ケイネスは怒りと混乱で叫びだすが、槍を持った男、ランサーは無視をして、さらに問い掛けた。
「あなたが、我が主でしょうか？」
「主？」
「はっ。その腕にある令呪が、契約した主の証であります」
言われてみると先ほどの痛みがあった腕に付けたはずのないアザがあった。

「馬鹿な！令呪が、私の令呪が、貴様に!?聖杯は私を選んだのではなかったのか!?」

ケイネスはもはや最後の砦も失ったことに絶望し、理解不能の状況下でパニックになっていた。

一方、主と言われた男は状況をすばやく整理していた。

「…なるほど。つまり、これは面倒事」

そして今度こそケイネスの頭に弾丸を撃ち込む。

「！、主、いったいなにを！」

それを見てようやく、特殊な現状が理解できたランサーの問いにこたえようとせず、男は言う

「なんでか知らんが…まぁ、つき合ってやるよ……聖杯戦争とやらにな」

「――――――、では、やはりあなたが」

「あぁ、お前さんのマスターだ。クラウス・クラウン。魔術盗賊なんて言うやつもいるがな」

クラウス・クラウンと名乗った男は今の状況をランサーに説明するのと、ここからどうやって動こうかを整理していた。

そしてすべての説明が終わるころ。

「よし、いい手を思いついたぞ。とりあえず、参加する奴の情報収集だ

な」

めんどくさそうに、だがどこか楽しそうな様子で言うクラウスを

（我が主は、どういう…いや、どのような人であろうと、令呪の契約を、忠節の道を貫くだけだ）

己の誓いを立てながらランサーこと、ディルムッド・オディナは見ていた。

本来のマスターから別のマスターへ。正史の道から少々外れた程度では未来が変わるわけではない。

が、少なくともランサーのこれからの戦いは正史とは外れた未来になることは容易に想像ができることであった。

彼らの聖杯戦争は今始まった。

飛び立つ者たち

1人の女が地下室への階段を急ぎ足で降りていた。ここに来るまでの道に魔術で作られた防御が破壊されていたり、中には無傷にもかかわらず、何者かが通った痕跡があった。

（いったい何者なの？ここまでたどり着いたのは…）

ここに潜入したものは恐ろしいほどに徹底していた。防壁や探知をするものを真っ先に破壊し、トラップはことごとく回避していた。ここがこの先にいるケイネスの所有している場所でないにせよ、それなりの守りあるのだ。

（ともかく、何があったのかは、ケイネスに聞けば何とかなるわね）

彼女はケイネスの心配などしていなかった。それは彼が優秀な魔術師というのもあるが、それ以前に彼女、名前をソラウ・ヌァザレ・ソフィアリは彼に対して何の興味もなかったのだ。

とはいえ、許嫁である彼女は一応彼の安否を確かめる必要があった。

「ケイネ…ス……」

彼女の目の前にあったのは惨劇に等しい状況であった。いたるところに爆破のような跡があり、支えとなっている柱のいくつかは崩壊し、床にはいくつものへこみができていた。

そんな部屋には全身がボロボロで人の原型を留めているのが奇跡と言っていいケイネスと

「おっと、情報にあった許嫁か。予定より早かったな」

見知らぬ男が2人いた。

「……」

だがそんな混沌と言ってもよい状況だというのに、彼女は死んだと思われる夫よりも2人組の男の特に異形な槍を持った男に目が奪われていた。

(なに、この感覚)

それは彼女が初めて抱いた想い。感じたことのないこの気持ちを言葉で表すのだとしたらそれは恋。

気づいていないだろうが彼女の頬はほのかに赤くなっていた。

「……」

「――――い、――おい――――おい、聞いているのか?」

「!」

どれほど見つめていたのか分からないほどソラウは驚く。そして、気持ちを必死に落ち着けようとする。

「あなた方はいったい何者ですか」

問いながらソラウはまた槍を持った男をみていた。

「そうだな。暗殺者けん、盗賊かなって、おい!だから聞いてるか!」

だが彼女はクラウスはもう見ていなかった。ランサーに彼女は見惚れていた。

「あーもう！ったく…おいランサー、いったん霊体化してくれ。お前さんのチャームの力でらちが明かん」

「はっ。申し訳ございません」

霊体化するランサーを見て

「あっ…」

悲しげな表情になるソラウと

（別に謝らんでもいいのだが）

めんどくさいなという言葉が顔でわかるような表情になるクラウスがそこにあった。

「…で、話を戻すぜ！」

「！え、えぇ。そうね」

ソラウはまたも意識が別方向に飛んでいたところを戻された。

「ごらんのとおり、俺は依頼を受けて対象を殺す暗殺者だ。このまま俺を帰らせてくれんならいいが、やるんだったら…」

「別にかまわないわ」

「やってやるぜって、へ？」

一瞬何を言っているのか分からず、思わずクラウスは場違いな声を上げた。

「言ってるでしょ、別にかまわない。どこへでも行きなさい」

「……」

警戒はしているがそれでも彼女が本当のこと言っているのはわかる。なぜならこの状況下で俺を油断させようとしているのだとしても、そんな言葉では意味がない。

「あんた、こいつの許嫁だろ？なんとも思わないのかよ」

「ケイネスが油断して死んだだけでしょ？それに、政略結婚だもの。この男に私は何の興味もないわ。それより、さっきの彼…」

「ん？あぁ、なんか知らんが、聖杯とやはケイネスから俺に変更したようだ。許嫁ならケイネスがこれからあの面倒な戦争に参加するってことは知ってんだろ？そのサーバント、ランサーだ」

「そう」

ソラウの抱いている感情にクラウスは気づいていた。

（なるほど。次に何を言い出すか、なんとなくわかるぞ）

「私も同行させて…」

「却下だ。あとこれに対してなんかしてくるようなら、遠慮なく叩き

潰すぞ」

ソラウはそれを聞いて絶望する。確かにこの状況下で自分の身を守ることは不可能に近い。

「……お前さんの情報は知っている。生まれたときから未来が決まった…いや、奪われているようなもんだからな同情はするさ」

「!、あなたになにがわかるっていうのよ!」

ソラウはここにきて今まで自分が発したことのない大声で叫んだ。

「生まれたときから枷を強いられ、女としてのすべてをすて、ソファリという魔道の血しか意味のないわたしのことが何がわかるっていうのよ!!」

クラウスは彼女の心からの叫び。ずっと奥底に秘め続けた想いを聞いた。彼女にしてみれば、ランサーとの出会いはそれこそ運命に感じただろうということもわかっている。

「…はっ、確かに知らねぇが、別に俺らについてこなくてもいいだろ?」

「え?」

「鳥かごのカギはもう壊れたんだ。ほれ」

とクラウスは一枚の紙切れをズボンのポケットから取り出しソラウに渡しながら出口に向かう。

「そこに書かれたとこに行けば、あんたの身元を隠してくれる。金な

らあんだろ？なら、今度は自分で飛んでみろよ。結構いいもんだぜ、世界は。お前さんを縛るもんはない。なら自分で探せ」

クラウスはそう言って去っていく。だが彼女はそれを追わず、声もかけなかった。

「なによ、こんな……」

自分をこの場で殺さなかった時点で、この紙切れに書かれたことに必然的に信憑性がでてくる。

「ほんとに、なんなのよ…」

誰もいない地下室で彼女は1人静かに泣いていた。

時は移り３０時間後――――――――

「ふぅ。ざっとこんなもんか」

専用ジェットに乗り込んだクラウスはいろいろと調べていた。

聖杯戦争についてはケイネスの情報収取の際に聞き、ある程度調べ、すべて記憶していた。だが彼にとってのある程度とは全体の８割であった。それをわずか半日にも満たないで記憶したのだ。

サヴァン症候群。絶対記憶能力とも言われているこの能力はコミュニケーション障害や自閉性障害のものに多いと聞くが、クラウスはどちらかといえばその部類には入らない珍しいものであった。

もちろん、膨大な情報には誤報も交じっているがそれらを分けることができるからこそ、クラウスは優秀であり、ケイネス暗殺には彼の戦闘の実力もあるが、ケイネスの切り札ともっとも暗殺できる場所を索敵できたのもこの能力のおかげというところが多い

「遠坂、アインツベルン、マキリの3家は確実か。残りは常時調べていくしかないな」

膨大な情報のため3台のパソコンを同時に使い、情報を素早くインプットしている。普通の人間なら脳がついていかないであろう。

「ケイネスの死は……まだ発表されてないな。好都合だ。なら、偽の情報にも信憑性が出てくる」

ソラウに渡したものは間違いなく本物ではあるが、彼女がケイネスの死を流すかは5割だった。

(本当に興味なかったんだな)

これにクラウスはひとまず安堵した。

(とはいえ、今回の聖杯戦争には厄介なやつもいるが…いや、まだわからん実際に見てみなくてはな)

彼にとって御三家など不安要素になどならなかった。むしろ他のことが不安だった。

「(とりあえずは) ランサー出てこい」

霊体化をといて姿を現したランサーはまたも首を垂れていた。

「お呼びでしょうか。我がある…」

「固い！」

「は？」

「だから、固いんだよ！もう少しフランクにできないのかおまえは！」

「申し訳ありません。しかし我が主、これは私の生き方のようなものなのです。どうか、お許しを」

「……はぁ～」

かつてこのような人種との会話があるわけがないクラウスは溜息しか出なかった。

「まぁいい。でだ、お前さんの宝具は、接触している物の魔力を打ち消す長槍『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』と、決して治癒のできない傷を与える呪いの短槍『必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）』だったな」

「はい、そうですが…いかがいたしましたか？」

「いや、確認のためだ、気にしなくていい。が、2本の槍なんてものでうまく戦えんのか？」

槍とはその長さから間合をとりながら戦い、相手を槍の死角に入られないようにしなくてはならない中距離専用の武器だ。それを2本持って戦うなど聞いたこともない。

なにより、ディルムッド・オディナの伝承で言うなら……

と、考えていると

「その不安、必ず戦いの中で払拭して見せましょう」

と自信を持って言ったのだ。

(なるほど、これは心配するほどのもんでもなかったな)

「じゃあ、話を変えよう。もうすぐ目的地に着くが、先に聞いておこう。お前さん、聖杯に何を願うんだ」

このダイヤモンドより固いやろうの願いはどんなものかと期待半分、面白半分にクラウスは聞いた。

「いえ、私は聖杯など求めはしません」

しかし、回答は予想の斜め上だった。

「はぁ？おまえ、サーバントだろ？未練があるから、叶えたい願いがあるから、聖杯戦争に参加するんだろ？」

クラウスの言い分はもっともであるが、

「そうです。しかし、私の願いに聖杯という褒章は必要ないのです。主である召喚者、クラウス殿に忠誠をつくし、騎士としての名誉を全うし、聖杯をあなたに譲り……主？」

「ｚｚｚ…おぉ！すまん、あまりにも退屈で寝てしまった！」

「く、クラウス殿…」

さすがにこの態度にはランサーも納得がいかないのか、ほんの少しだけ、分かりにくいほどの怒りがでていた。

「つかさ、俺だからいいが、他の奴ならまず信じないぞ。何が悲しくて、過去に名を連ねた英雄様がただの人間に使い魔として働かにゃいかんのだ？願いがあるからだろ普通？」

「言い分はもっともです。しかし、これは嘘偽りのない私の真実の気持ちなのです。どうか、どうかクラウス殿、信じてください」

ランサーは必死に、土下座に近い体制で言う。

「だぁ、もぉ！わかった、わかったから！頭を上げろ」

「感謝します。我が主」

「はいはい。さて、そうだなー」

クラウスはしばし考え。

「よし、決まった」

「何がでしょうか？」

「俺の願いだよ。正直願いなんてもんはないし、勝ってもどうしようかと悩んだが、いいこと思いついた」

うきうき気分でいう自分のマスターに「はぁ」と言いつつも自分のこと以上にうれしがるランサーであった。

「さて、もう戦いの舞台、冬木につくが…」

目の前にある情報に目をつけながらクラウスは再び考える。

「できれば、海外にいるやつの中では俺が一番であってほしいな」
その理由はクラウスがもっとも警戒する人物が参加している可能性があったからだ。
「あいつに勝つには、それこそ入念な下見が必要になるからな」
「あいつ、とは？」
「気にするな。まだ決まったわけじゃない」
ランサーに言ったことは間違いではない。だがいるならまず間違いなく強敵になる。
（衛宮、切嗣。なぜお前が）
魔術師殺しの名をもつ男。もっとも警戒し、もっとも信用してはいけない男。
（本当にお前が参加するとして、目的はいったい何なんだ）
魔術師を暗殺する者同士として、奴とは偶然にも共同…いや、共同というべきではないだろうがとにかく同じ対象を殺すことになったのだ。
だがそのやり方が納得できない。周りの人間を巻き込んだ爆破。今にも思い出す。自分を囮にして、対象をおびき出し、テロに近い爆破。
確かにその方法で行けば確実的だろう。だがやはり納得いかない。

あのまま俺が対象を誘導し人気のないところでひっそりと殺すこともできた。俺にその実力があることぐらいはあの男はわかっていたはずだ。

暗殺者であるクラウスは基本金で動く。だが、自分なりの信念ももっている。だからこそ、無関係な人間を巻き込んだ行為は自分の矜持に反するのだ。なにより、あれは暗殺ではなく、殺戮だ。

運よくその時俺は死なずに済んだがしばらく身を隠すほどの傷も負った。

それからは衛宮切嗣は彼にとってもっとも信用してはいけない人物となり、同時にもし次に会う時のために徹底して奴の殺し方を密かに見てきた。そして、奴の切り札と思えるものも判明するこができた。

これもすべては、次に会ったときに、必ず対応できるように

そしてあれから月日がたったが合うことはなかった。

(金が目的じゃないのはわかっている。今までの経歴を見れば、死に急いでるかのような生き方をしているあいつが金で動くと思えない。ならいったい…)

「――――ス殿、クラウス殿」

「！すまない。心配かけたか、ランサー？」

「いえ、目的地に着いたようです」

そう言われ窓の外を見ると都市が見えていた。

（考えるのは後だな。いまは、やるだけのことをやろう！）

しかし、クラウスは知らないだろうが、彼のほぼ期待通り、海外から来たマスターは現在彼も含めて2人であり、その中に警戒していた衛宮切嗣はいない。

現状はクラウスの思う以上にうまく回っているのだと気付くのはもう少し先となる。

いよいよ、それぞれの思惑と欲望が入り混じった聖杯戦争が始まろうとしていた。

「設定」クラウス・クラウンについて

名前

クラウス・クラウンについて

＊実はこの名前も偽名である。彼の本名とその経歴は一切削除されており、知っているものは世界でも片手で数えるほどしかいない。この名前は彼が世界で持つ偽名の１つで特に気に入っているものなので基本的にこの名前を使用している。彼自身もこれが本名でもいいと思っている。

＊魔術盗賊という異名をもち、その理由は倒した相手から魔力のこもった宝石や魔術道具、礼装を奪い取り、宝石に関しては自身の戦闘にも活かしていることからついた名前。もっともたいていの人間はそれを売っているだけと思っているのでそちらのほうが異名のゆえんになっている。

使用する魔術について

＊基本的な魔術は一通りでき、なかでも得意なのが幻術と幻影、そして認識阻害を複合した分身を作ることである。また、肉体強化と感覚の一部遮断を行うことで肉体のリミッターを解き放つことにより一時的に常人の何倍もの動きができる。

＊魔術師としては下の上から中の下ほど。一通りの魔術ができても彼自身の魔力総数が少ないため威力が落ちたり長時間の行使はできない。

＊足りない魔力は宝石に溜め込んだ魔力を取り込んで使用している。自身のものと合わせると宝石の数はかなりのものとなる。その

ため彼のポーチや隠しポケットなどに魔力のこもった宝石をいくつも持ち合わせている

戦闘法

彼いわく、現代式魔術戦闘術。

＊銃器には魔力を溜め込んだ宝石の弾丸を使う《魔宝石弾》を所持。状況や相手に合わせて威力を変えており、レベルは全部で４段階である。

＊様々な格闘技を取り入れた複合柔術。ボクシング、空手、太極拳、ムエタイ、ＣＱＣ、ｅｔｃ……それらの良い部分を合わせた格闘術である。

性格など

＊基本的にめんどくさがりやだが依頼者との契約はしっかり守る。

＊暗殺は犯罪と分かっているがそれに誇りは持っており、契約にあった人物以外は決して殺さず、巻き込むことも嫌っている。また、相手によっては契約を破棄する場合もある。

（例、相手が子供の場合、依頼者からの情報が違う相手だった場合、殺したら世界に悪影響がある場合等）

＊一度やると決めたら徹底的にやる。自慢の絶対記憶能力を駆使してターゲットの情報を入念にチェックして、そこから相手の戦い方や切り札と思われる物を考察、対応ができる。

＊任務以外にも日本にはプライベートでよく訪れている。実はかなりの日本ツウ。が、なぜかこれだけは間違った知識が多くある。

ランサーのランク

ステータス

＊筋力：B　耐久：C－　敏捷：A　魔力：D　幸運：D＋　宝具：B

召喚直前にケイネスからマスター権がいきなり変わったことによるものと、マスターとしてのランクが低いためいくつかのステータスが下がってしまっている。が、幸運はクラウス自身の運が強いため（ランクで言うならAほど）少し上がっている。

ステータスを戻すあるいは上げるには現状のクラウスの魔力だけでなく、別のきっかけとなるものが必要と思われる。